周辺からの記憶 38

2020 年　福島

村本邦子（立命館大学）

今年の 1 月、鹿児島で学会があって、友人を知覧に案内した。知覧平和祈念館は昨年も訪れたところだが、前回と比べて語り部の話がアップデイトされていた。「なでしこ隊」（特攻隊のお世話をした知覧高校の生徒たち）だったという母親の話や、女子高生たちがお守り代わりに渡していた手作りのマスコット人形を特攻隊員が大切にしていた話は興味深かった。

もうひとつ、私が以前、本で読んで、強烈に印象に残っていたエピソードも紹介された。幼い子どもが 2 人いて、特攻隊に行く立場ではないのに、「自分も後から行くから」と教え子たちを送り出した教官が、妻の必死の頼みにも耳を貸さず、特攻隊に志願していた。観念した妻は、「私たちが残っていたのでは、あなたも心残りになるでしょう。お先に行って向こうで待っています」と、二人の子どもを連れて川に身を投げた。その後、夫も後を追うように特攻隊で飛び立った、あの世で家族 4 人仲良く暮らしていることでしょうという話だった。

語られなかったもうひとつのエピソードは、逆に、妻の反対を押し切って特攻機に乗ったが、どういう方法でかその特攻機を突き止め、滑走路に走り出て出撃を止めたりと、妻が二度も妨害して、結局、出撃できないまま敗戦を迎えたという話である。ずいぶん昔、本で読んで忘れられない対照的な話だった。語り部の講話が終わった後、このエピソードのことを伝えに行った。それは認識していなかったということで、出典を知らせた。次からは、このエピソードも語ってくれるだろうか。女性の立ち位置を強烈に感じさせられるエピソードである。語り継ぐ物語が与える印象やメッセージは、語り方によって大きく変わる。

2022年9月　原子力災害伝承館へ

今年のプロジェクト最終地である福島も、リモートでの開催となったが、実は、9月24-26日、個人的に福島へ足を運んだ。2019年に訪れたチェルノブイリと福島の記憶の継承について、河野暁子さんと一緒に論文を書いていた。福島のミュージアムとして、福島県環境創造センター交流棟（通称コミュタン福島）を筆頭に、環境再生プラザ（旧除染情報プラザ）、特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま（以後、リプルンふくしま）、東京電力廃炉資料館（以後、廃炉資料館）、原発災害情報センターを取り上げていたが、2020年9月20日に東日本大震災・原子力災害伝承館がオープンしたのだ。もともとは7月オープン予定とされていたが、コロナ禍のオリンピック延期により遅れていた。締め切りまで1週間を切っていたが、これは論文に反映しなければならないと、急遽、双葉へ向かった。

「伝承館」は、震災と原発事故の記録や教訓を後世に伝えことを目的に、国が計53億円の事業費を負担し、公益財団法人「福島イノベーション・コースト構想推進機構」が指定管理者として運営している。コミュタン同様、非常に立派な建物だ。入場料は600円。しかし、「写真撮影はできない。国や東京電力の津波対策の不備や情報発信の問題点に触れていない。炉心溶融、メルトダウンという言葉を隠し、SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測システム）予測結果の公表が遅れたことなどは説明されない。『原子力明るい未来のエネルギー』の看板は写真のみである。語り部29人が日替わりで常駐しているが、内容は検閲されている」など、オープンと同時にマスコミやネット上で批判が相次いだ。放射能のリスクについての展示が皆無であることは大きな問題だと思った。

とは言え、原発事故について、爆発の映像とともに現場の電話音声が公開されており、緊迫感が伝わってくるし、事故直後の対応では、東京電力の職員、オフサイトセンターや自治体で指揮に当たった人々の証言がモニターで見られる。「高い放射線量の中、誰かが状況を確認しなければならず、自ら志願した人がいた」という証言があり、その人はその後どうなったのか気になった。

映像では、県民の平穏な日常がどのように変化したのかの証言を聞くことができるが、とくに語り部による口演は印象に残った。南相馬市に住む三人の子どもを持つシングルマザーで、何の情報もなく、どうしたらよいのか皆目見当もつかないなか、個人の判断で必死に逃げ回ったこと、一時的に家族が別れて暮らし、子どもが精神的な問題を抱えたこと、南相馬市に戻り家族で暮らす選択をしたこと、子どもに甲状腺嚢腫が見つかったが何度目かの検査でそれが消えたこと等々を語られた。

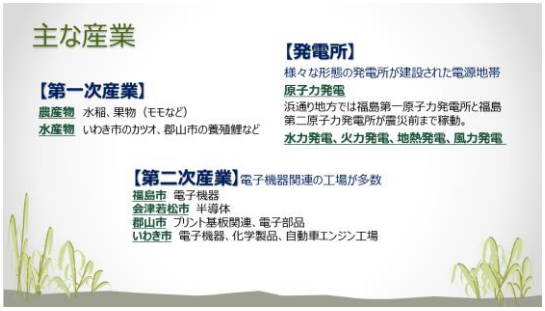
立ち話ではあったが、たまたま一緒になった来館者やスタッフと話し合う機会を持

つことができ、とても有意義で満足度が高まった。展示を見た人々が、感じたことや考えたことを他の来館者と語り合い、分かち合うことができるようなコミュニケーション・スペースがあるといいと思った。

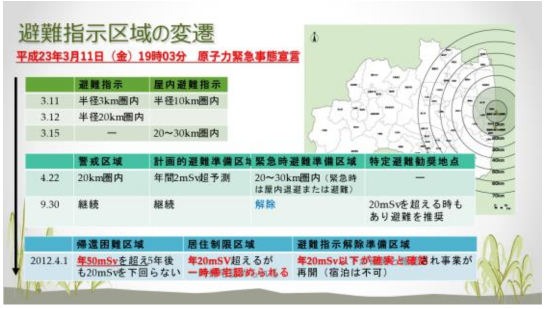
その後、12 月の漫画展の打ち合わせのため、福島市にある極久里珈琲を訪れた。

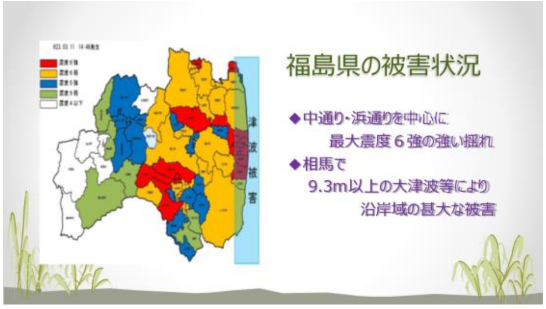
11 月 23 日(月) 福島事前学習報告

プロジェクトでは、6 人の院生が福島企画委員となってくれ、ZOOM で 2 回の企画委員会で企画を決めた。最初は、院生たちによる事前学習報告である。ここには、院生作成のパワポのごく一部を紹介する。



東日本大震災の概要
名称 東北地方太平洋沖地震
発生日時 2011年3月11日 14時46分頃
震源地 牡鹿半島東南東約130㎞付近
震源の深さ 約24㎞
規模 マグニチュード 9.0（福島県は震度6強）
断層の大きさ 長さ 450km, 幅 200km
本震後の余震（3/11~17まで）
発生当日 224回（震度４以上 20回）
発生から１週間 762回（36回）
出典：気象庁資料発表
出典：福島県土木部作成「東北地方太平洋沖地震による被害概況」


避難指示区域の変遷
平成23年3月11日（金）19時03分 原子力緊急事態宣言
避難指示 屋内避難指示
3.11 半径3km圏内 半径10km圏内
3.12 半径20km圏内
3.15 ー 20~30km圏内
警戒区域 計画的避難準備区域 緊急時避難準備区域 特定避難勧奨地点
4.22 20km圏内 年間2mSv超予測 20~30km圏内（緊急時は屋内退避または避難） ー
9.30 継続 継続 解除 20mSvを超える時もあり避難を推奨
帰還困難区域 居住制限区域 避難指示解除準備区域
2012.4.1 年50mSvを超え5年後も20mSvを下回らない 年20mSV超えるが一時帰宅認められる 年20mSv以下が確実と確認され事業が再開（宿泊は不可）

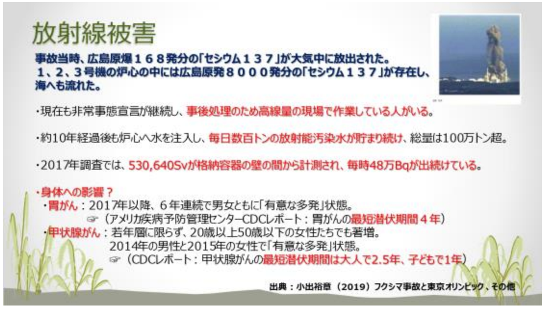

福島県の被害状況
津波被害
◆中通り・浜通りを中心に
最大震度６強の強い揺れ
◆相馬で
9.3m以上の大津波等により
沿岸域の甚大な被害

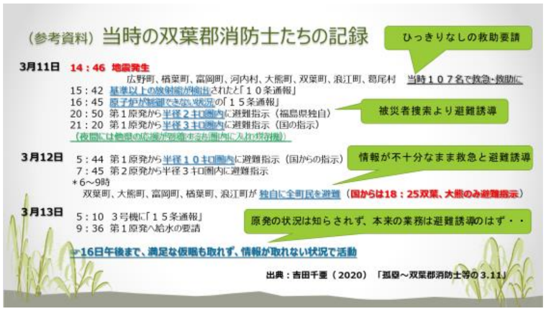
現在の避難指示区域
避難者合計 37,000人（2020年9月30日現在）
・県内への避難者数 7,471人
・県外への避難者数 29,516人
・避難先不明者 13人
<避難指示解除の要件>
年間積算線量が20mSv以下
☞チェルノブイリでは5年経過後、
5mSv以上で移住義務
双葉町の避難指示が解除
・駅周辺などごく一部に限定
・5900人の住民はまだ帰れない
避難指示区域の概念図

人的被害 特徴は関連死の多さ!!
☑1995.阪神・淡路大震災
死 者 6,402（全国6,434）
直接死 5,483
関連死 919
（平17年12月22日兵庫県発表）
死 者（人）
直接死 ＊関連死 ＊死亡届者 合計
浜通り 1,568 2,236 222 3,880
中通り 36 76 3 112
会 津 1 3 0 4
1,605 2,315 225 4,145
＊関連死：災害による直接の被害ではなく、避難途中や避難後に死亡した者の死因
＊死亡届者：明確に死亡が確認できる遺体が見つかっていないが、死亡届等が出されている者
出典：平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報（第1769報・2020年10月2日） 福島県災害対策本部

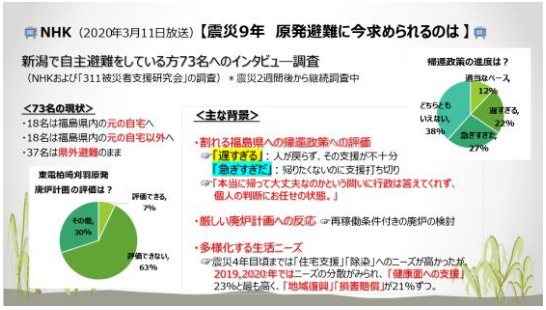
除染
放射性物質には「半減期」がある。事故後まだ約10年…。
例えば、ヨウ素131 は８日間、セシウム137 は30 年間で半減するが、
カリウム40 は13 億年かかる。
〇 県内の面的除染は、帰還困難区域を除き、平成２９年度末までに全て終了しました。
出典：福島県生活環境部除染対策課（2020年3月）福島県の除染等の取組み

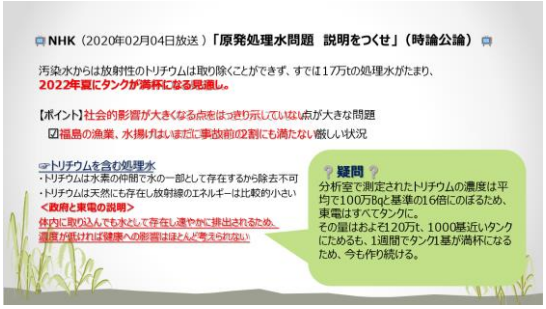
原発事故
放出された放射性物質は8万テラベクレル（ヨウ素131、セシウム137）
☞ INESでは最も重い評価レベル7（INES：国際原子・放射線事象評価尺度）
平成23年3月11日(金)14時46分
福島第二原子力発電所 1~4号全機自動停止
14時49分 津波警報(大津波)発表
15時37分頃 津波により第一原子力発電所 1~3号機で所内電源を全て喪失
※以下、第一原子力発電所の状況
平成23年3月12日(土)15時36分頃
直下型の大きな揺れが発生 →水素爆発
平成23年3月14日(月)11時1分頃
3号機原子炉建屋で白煙発生 →水素爆発
平成23年3月15日(火)
6時頃 2号機圧力抑制室付近で異音発生 →水素爆発
6時14分頃 4号機原子炉建屋 5階屋根付近に損傷確認 →水素爆発
事故後の福島第1原発1号機
事故後の福島第1原発3号機と4号機
出典：独立行政法人 防災科学技術研究所（2012）東日本大震災タイムライン

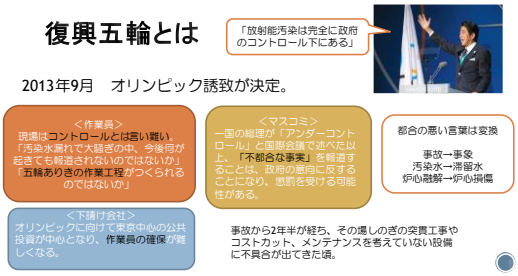

放射線被害
事故当時、広島原爆１６８発分の「セシウム１３７」が大気中に放出された。
１、２、３号機の炉心の中には広島原発８０００発分の「セシウム１３７」が存在し、海へも流れた。
・現在も非常事態宣言が継続し、事後処理のため高線量の現場で作業している人がいる。
・約10年経過後も炉心へ水を注入し、毎日数百トンの放射能汚染水が貯まり続け、総量は100万トン超。
・2017年調査では、530,640Svが格納容器の壁の間から計測され、毎時48万Bqが出続けている。
・身体への影響？
・胃がん：2017年以降、６年連続で男女ともに「有意な多発」状態。
☞（アメリカ疾病予防管理センターCDCレポート：胃がんの最短潜伏期間４年）
・甲状腺がん：若年層に限らず、20歳以上50歳以下の女性たちでも著増。
2014年の男性と2015年の女性で「有意な多発」状態。
☞（CDCレポート：甲状腺がんの最短潜伏期間は大人で2.5年、子どもで1年）
出典：小出裕章（2019）フクシマ事故と東京オリンピック、その他

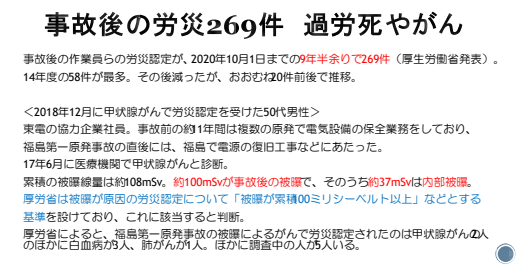

（参考資料）当時の双葉郡消防士たちの記録
ひっきりなしの救助要請
3月11日 14：46 地震発生
広野町、楢葉町、富岡町、河内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村 当時１０７名で救急・救助に
15：42 基準以上の放射能が検出されたと「１０条通報」
16：45 原子炉が制御できない状況の「１５条通報」
20：50 第１原発から半径２キロ圏内に避難指示（福島県独自）
21：20 第１原発から半径３キロ圏内に避難指示（国の指示）
被災者捜索より避難誘導
3月12日 5：44 第１原発から半径１０キロ圏内に避難指示（国からの指示）
7：45 第２原発から半径３キロ圏内に避難指示
＊6~9時
双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、浪江町が 独自に全町民を避難（国からは18：25双葉、大熊のみ避難指示）
情報が不十分なまま救急と避難誘導
3月13日 5：10 ３号機に「１５条通報」
9：36 第１原発へ給水の要請
原発の状況は知らされず、本来の業務は避難誘導のはず・・
☞16日午後まで、満足な仮眠も取れず、情報が取れない状況で活動
出典：吉田千亜（2020）「孤塁～双葉郡消防士等の3.11」

復興とは
NHK（2020年3月11日放送）【東日本大震災９年-思い描いた復興は】
今の復興の姿は？
（東北3県被災者2,000人へのアンケート調査）
良い, 21%
思い描いていたより悪い, 49%
思い描いた通り, 20%
<主な理由>
・経済面の厳しさ
☞「地域経済の復興に実感があるか」の問いでは約7割が「実感なし」と回答
・原発と地域のつながりの課題
☞「思い描いていたより悪い」と回答した人の約6割近くが「地域のつながりの復興の実感なし」と回答
(背景)
インフラ整備がかなり進んだが、人口流出、未だ継続する帰還困難区域、避難指示解除後の住民の帰還が未だ進まない。









12月3日(木)　震災10年を経て
-市澤秀耕さん＋市澤美由紀さん(極久里珈琲)

毎年、福島に行くと必ず訪れる極久里珈琲の市澤美由紀さんと秀耕さんにこの十年を振り返っての思いを聞かせて頂いた。

美由紀さん･･･1992 年、飯舘村に自家焙煎の珈琲店を立ち上げ、そんな田舎に誰が行くかと言われながら、百キロ圏内のお客さんが来てくれて、3 年経った頃には行列のできる店になった。借金も返し終わり、これからは楽しみながらやりたいなと思っていた矢先だった。

20 年目を迎えるところでの原発事故。飯舘村は 40 キロ離れていたので放射線量が高いとは知らず、被爆していた。4 月 11 日に計画的避難区域に指定され、13 日には店の道具を荷造りして、「とにかく逃げなさい」と従業員たちを解雇した。若い人たちを被爆させるわけにはいかなかった。

福島市に引っ越したのは、事故から 2 ヶ月以上経った 5 月 25 日だった。仕事中心の生活だったので、まずは店をやれる物件を探し、解雇したスタッフを戻すということで 7 月に仮店舗で営業を再開した。今の店は、土地を買うところから始めて、2015 年に福島店として本格オープン、ここまで来るのに 5 年かかった。

9 年が過ぎ、少しずつ福島の店として認められてきたかなというところで、体の半分くらいは福島に慣れたが、頭にはいつも飯館のことがあり、胸の中がムカムカ、ドロドロしている。今年、漫画展に手を挙げたが、今までとにかく必死で、やっと今年になってイベントをやろうという気持ちになっ

た自分がいる。

秀耕さん･･･店があってコムコムの漫画展を見たことがなかったので、今回は宮古市まで見に行った。良かったなと思った。避難の十年は大変で、いつも怒りがあったが、「これでは体壊すな。笑ってないとやってらんねえ」という感じで、笑ってなければ生きていけないような状態だったが、5 年くらい経って、笑うこともできなくなった。

夫婦で一緒にやってきたが、椏久里珈琲への思いには少しずつ違いがあり、自分は役所をやめて店を始める時、農業と珈琲でやっていこうと思った。親が農業をやっていたが、できなくなったので、先祖代々の土地を活かしてと、ブルーベリーの栽培を始めたところだった。原発事故で農業の部分がすっぽり抜けてしまい、人生の目標をひとつ失った。福島の店も頑張って軌道に乗ってきたが、やはり農業への思いがある。飯舘村のブルーベリーは、最初の年、500 ベクレルあった。食用は 100 ベクレル以内だったし、少しでも汚染されているものは使いたくないと思ったが、一昨年から ND（不検出）になって、昨年も ND で、まったく検出されなくなった。「これならば使えるな」と、何とか畑を再生させていきたいと考えている。66 歳になり体力も衰え、将来の見通しは立たないが、「きちんとやっていけば、何とかなるかな。それがこれからの生き方かな」という思いで、休日には飯舘に帰り、畑仕事をしている。先祖代々というのもあるけれど、土地が荒れていくのを見ていられない。周りにいる同世代の者たちは皆、同じ思いでいる。

美由紀さん･･･夫婦であっても考えは別、尊重し合う関係を築いてきた。店も来年で 30 年目となり、目標像は少し違うところもあるが、良いとこ取りすれば奥深い店になるだろう。

福島に来て店を始めた頃は、避難民のたまり場みたいな捉え方をされていた。客の顔の半分は浜通りの人で、いつも津波や原発事故のことを話したり、泣いていたりというような店になっていて、もう少し普通の店にできないかと思ってきた。ここ 2~3 年でようやく地域の人たちにも通ってもらえる店になった。近くに浜通りの復興住宅があり、皆さん孤独なので、「1 日、誰とも話しないというような時には珈琲飲みに来てね」と言ってあるし、浜通りの人ももちろ

ん来てくれる。良し悪しは決められないが、どんな方たちにも良いコーヒーとおいしいお菓子と場を提供できたらと思う。

飯舘の家は広く、9 部屋に 3 人で暮らしていた。今は狭い所で、隣の家も近いし、眺めもない。たまに飯舘に行くと、「こんなに広かったんだ」とあらためて思う。7 棟あったが、除染もできないし、朽ち果てていくだけだから、住居部分だけコンパクトにリフォームして、あとは全部壊した。家の中の片づけに 1 年くらいかかった。子どもたちは「リフォームしてどうするの？」と言うし、戻るのかどうなのか、家族でも、自分の中でもぎくしゃくして、どうしたらいいのかわからない状態だった。そんな中でマスターがどんどんリフォームを進め、結局、今の私たちには良かったのかもしれないが、今後のことはわからない。

飯舘の店はそのままだったが、2 年くらい前に借りたいという人がでてきた。貸してしまえばもう戻れない。2 店舗できれば理想だが、現実にはひとつで精一杯。結局、貸すことにして、今年の夏、飯舘に移住してきた方に貸した。年々、いろいろ変化している。心もどんどん変化していく。来年はまた何かが変わるのかもしれない。今を一生懸命やっているが、何が起こるかわからない。未知。こんなことを考えないといけないこと自体が悔しい。

私たちも苦しんでいるが、もっと苦しんでいる人もたくさんいる。お客さんもいろんな思いを持っていて、いろいろ話す。何もかも、家族も亡くして、一人復興住宅に入り、生きようと葛藤している人もいる。周囲をよく見ると、自分たちは家族を亡くしたわけでなく、一所懸命頑張るという役割を果たしていかなければと思う。もともと福島にいた人も傷を負っている。福島全体が悩みを抱えている。農家の人の風評被害。家の周りには除染したものが埋まっている。避難でなくても悩みがあるし、伊達市では一部避難で地域が分断。自分だけが避難して辛い辛いと言っていても、皆が辛いことを理解したいと思っている。

秀耕さん･･･震災前、飯舘村は 6000 人、1800 戸だった。平成 27 年の春、長泥の帰還困難区域を除いて避難解除された。現在、戻ったのは 1400 人。うち、かつての村民は 1300 人で、残り 100 人は移住者。従来の村民はほとんど年寄りで、移住者には若い人たちが多い。移住のための優遇措置も手厚く、役に立ちたい、新しい事業にチャレンジしたいという人たちで、そういう人たちがエンジンになって、これからの飯館は新たに築かれていくのかもしれない。南相馬の小高も同じ。とは言え、農業には蓄積が必要でリスタートはなかなか難しい。

お話の後、参加者との対話が行われた。年月が経ち、村民との集まりも減ったこと、「復興だ、復興だ」と言われるが、「ガハハ

と笑えるつながり」が失われ、みんな逆に笑えなくなっていることを知り、言葉を失う。飯舘や新地は坂上田村麻呂の時代から 300 年に 1 度は戦があって生き延びた人たち。何かが起こっても起こらなくても、十年という年月は変化を与えるなどの話が出た。

個人的には、秀耕さんの名前にも込められた農業への強い思いをあらためて知ったこと、美由紀さんの飯舘で生まれ育った娘たちの哀しみに故郷喪失の辛さは想像を絶していたという話が印象に残った。新しい店も軌道に乗り、外からは苦難を乗り越えて力強くやっておられるように見えても、こんなふうにひとつひとつのエピソードから根底にある思いを少しでも想像することができる機会は貴重だと思った。多くの人々に知って欲しいと思う。

以下、参加者アンケートの声を紹介したい。

・ひとつの画面からおふたり並んでお話しされている様子を見ることができて、それぞれを尊重され、歩んでこられた道が垣間見られたように感じました。
・年を経過する度に心の復興があるのではなく、気持ちには変化があり、割り切れない複雑な思いを抱えて生活されているのが伝わってきました。
・原発事故が奪ったものはあまりに大きいと、改めて感じました。原発事故を我が事として考えていこうと思います。
・心の底から笑える状況ではないお話、娘さんの故郷を失う悔しさのお話をお聞きして、涙が止まりませんでした。辛い状況から前に進んでおられる事が伝わり、自分自身も前に進んでいく力を頂きました。
・10 年という年月の中、生活の変化、家族や友人、故郷への思いなど様々な情景が見えるように伝わってきました。被災された方にとっての本当の復興とはなんぞや。そんな本質を問いただすようなお話しだったと感じました。
・話を聞くことができて感謝しています。子と親との飯舘への思いの違いがとても印象的でした。数年ではなく数世代のスパン。われわれの証人役割もそのぐらいのスパンがいるのかもと思いました。

12 月 5 日(土) 団士郎漫画トーク

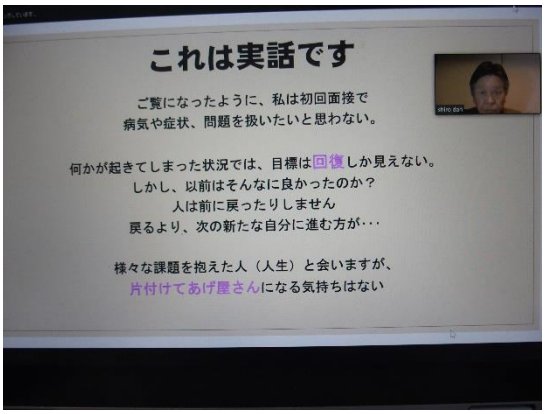
今年度の漫画展は、初めて極久里珈琲で行なわれた。場所が変わったことで客層が変わり、年配の方が増えたようだった。極久里珈琲の方からは、アンケートも多く、他の地区でも巡回できないかなど積極的な声もあがったらしい。今年、参加院生たちにとっては、すべての場所のプロジェクトに参加することが可能になったため、漫画トーク

の内容は重複する部分も少なくなかったが、聞くたびにあらたな発見があるとの声があがっていた。ブレイクアウトルームを使った交流も高評価だった。

終了後のアンケートには、以下のような感想が寄せられた。

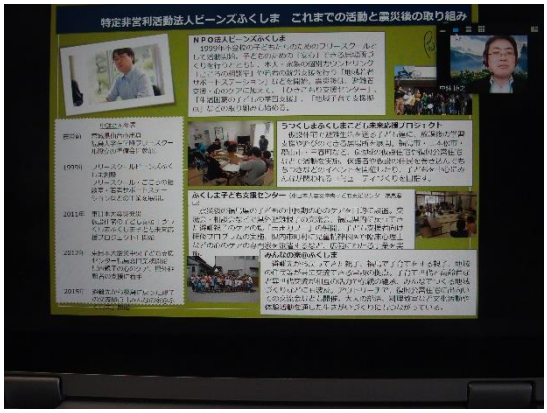
・友人に招待されて、初めてお話しを伺いました。何気なく過ぎていく日常の合間に、ちょっと立ち止まって自分の事や自分を取り巻く周りの事を見つめ直す事が大事だなと思いました。
・ご一緒させていただいた方と感想を共有できたこともよかったです。一人で夜空を見上げた日のこと、見上げる余裕もなかった日々のことを思い返しました。
・私自身、生き方についてぼんやりと悩んでいることもあって、今日のお話を聞いて少し心が軽くなりました。
・お話が、今とこれまでの自分の状況とぴたりと当てはまり、話を重ね合わせて聞かせていただきました。「人は刻々変わるもの」ということを改めて考えました。
・初めて参加させていただいて、このような形は初めてでしたが、とても良い機会を与えられました。極久里さんまで原画を見に行かれなくて残念です。 団先生の作品、是非拝見したいです。
・さまざまなヒントをいただき、そのことを心に置いて相談に乗っていきたいと思いました。少し気が楽になった気がして、同じ話を違う状況で聞いているとこんなふうに違って聞こえてくると気づきました。また、グループセッションの参加者の方からもとてもいいお話が聞けました。

有難うございました。



12 月 5 日(土) 被災者支援 9 年のあゆみと残された課題
中鉢博之さん＋小磯厚子さん

中鉢博之さん（特定非営利活動法人ビーンズふくしま常務理事・事務局長）と小磯厚子さん（白河市つどいの広場事業おひさまひろば副代表）に、被災者支援 9 年のあゆみと残された課題について話してもらった。

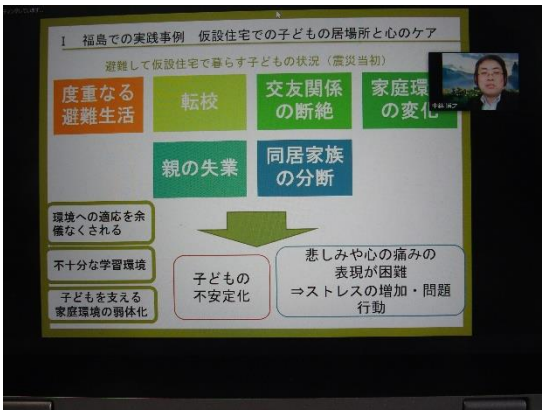


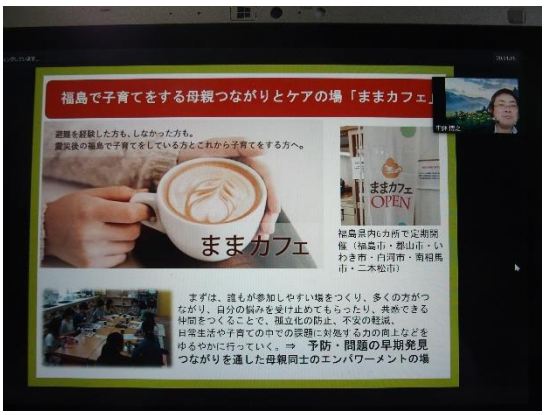
中鉢さん･･･ビーンズふくしまは 1999 年からフリースクールとしてスタートした団体で、不登校の子どもと家族、地域に関わってきた。震災によって地域のダメージは大きく、仮設住宅での子どもの居場所づくりや学習支援、中長期の心のケアとしてお母さんたちが集い悩みを話すことのできる「ままカフェ」、子育て中の家族や地域の人々が交流できるなとしての「みんなの家」などの事業を展開してきた。

福島の復興はひと回りもふた回りも遅れている。避難指示解除されても若い人がなかなか戻らない。令和 2 年 11 月現在で、県外避難者は 29,359 人、県内避難者は 7,459 人いる。しかも、この数字にはカウントされない人たちがいる。自主避難の人たちや、復興住宅に入ると避難者数から除外されるので、故郷に帰れているわけではない。

仮設住宅での支援をしてきたが、たとえば浪江の仮設を例にとると、自宅から 80 キロ離れたところにバラバラに避難し、転々とした。プライバシーなし、転校、友達との別れ、家族の分断、親の失業、家庭環境の変化などによって、子どもも不安定になり、ストレスも高く問題行動も見られた。9 年経って、仮設から復興公営住宅へ、避難先での住宅建設があり、避難指示が解除されるなかで親の迷いと決断、子どもの不安があった。

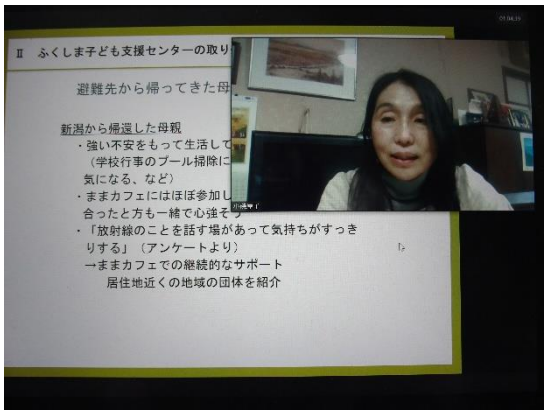
母子で自主避難した人たちが帰ってくると、放射線の心配がある。震災後に子どもが産まれた人、震災後に引っ越してきた人も強い不安を抱えている。「ままカフェ」、食と放射能の講習会などもやってきた。





小磯さん･･･白河は安心・安全と言われている場所だったが、避難しようがしまいが、全員が被災者であり、線量の高さや避難した人だけが支援の対象ではない。白河でもと手を挙げて、「ままカフェ」をスタートさせた。まったく安全だと思っている人、安全だと思って避難してきた人、避難した人などさまざまな立場の人たちがいて大変だったが、それぞれの事情に合わせた道筋がある。おそらく、場所、場所で、「ままカフェ」のあり方は違うのではないかと思う。

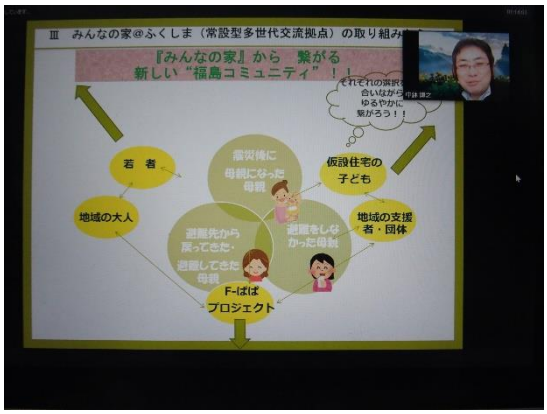
福島では、一時期、線量について話しにくい空気があった。「県も国も安全だと言っているから、大丈夫」と思っている中で、「心配だ」と言いすぎると外されると思って言い出せない人もある。心配事を堂々と言える場所として「ままカフェ」があった。忘れたいと思っても、線量計が眼に入り、除染の案内が耳に入り、忘れさせてもらえない場になっている。ここ何年かは、線量のことを言う人は減ってきているが、もしも気になったら、いつでも言える場があるといいなと思っている。

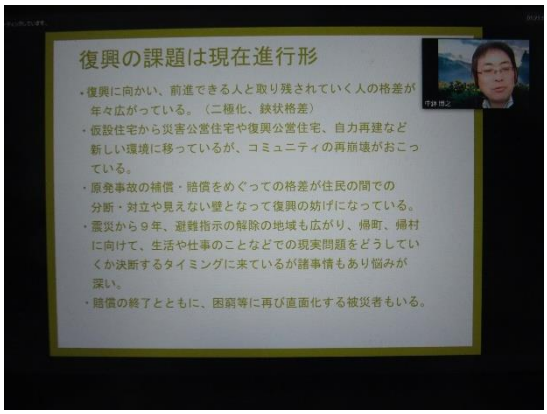


中鉢さん･･･今年は、コロナでマスクや行事ができないなど震災を思い出すことが多く、「あの時もひどかったけど、今もひどい。思い出してもやもやする」というような声を聞く。安心できる場があれば共有できる。「ままカフェ」の常設拠点として、分断を回復できる場として「みんなの家」をやっているが、コロナで予約制となり、食事もできず、交流活動がやりにくくなっている。テーマを決めて話す「ままトーク」を始めた。オンラインでもやっているが、県外や沿岸部からの参加もあり、思わぬ良い面もあった。

これからの子どもたちに、大人として何を届けられるのか。村本より、当時子どもだった人たち、現在の子どもたちの様子を聞いてみた。中鉢さんからは、「復興課題は現在進行形で、不登校や生活困窮などのなかに震災課題が入り込んでいる。当時、幼稚園くらいだった子どもたちも、故郷や避難のことを結構覚えていて、話題を共有できる友達がいると、ふとした拍子に話すことがある。それ以下だった子どもたちはあまり意識していないかもしれない。学校で放射線教育やコミュタンなど社会見学はあるが、わずかな時間だし、震災については深く学んでいないのではないかと思う。仮設には、当時小学生で劇的変化があり、当時、我慢してたことを、理不尽だったと表現する子はいた」という事だった。小磯さんからは、「今、高校生くらいで、避難した経験がある子どもは、その時の体験が良くも悪くも影響している。環境が劇的に変化して、どうやってそこにいたらいいか悩みもがき苦しんでいたことが親の眼にも明らかだった子ども、学校や進学にも何らかの思いがあったり、当時、進学で他県に行った子が、福島から来たことを隠さなければならない自分が

1 年くらいいて、それが辛かったという声を聴いた」ということだった。





参加者からもたくさんの声を頂いた。

・「これから福島の子どもたちに何を届けたらいいのか」ということばを反芻しています。誰かと一緒に感じることのできる場は、どんな場所でも必要だなあと感じるお話しでした。
・実際に福島で支援をやってこられている方々のお話を聴いて、福島の現状を知ることができました。
・ひとりひとりの思いを大切にできる場所であり、支えとなる場所があるというだけで救われる方は多いと思います。コロナ禍で大変だと思いますが、続けてほしいと思いました。
・福島での子どもの様子や具体的な支援を知ることができたこと、さらに今後の課題も聞くことができ、自分自身、何ができるかと考える機会となった。
・福島の復興は、まだ他の被災地に比べて遅れていると仰っていましたが、毎年聞かせて頂く度に現状を知ることの大切さを思います。とりわけ、「ママカフェ」は、「お母さん方とって大変有難い場だ」と子育て支援をしている私は思いました。
・毎年素敵なおもちゃを見せてくださる小磯さん、いつも笑顔でしっかりとした声の張りから前向きな思いが伝わって元気をいただきます。（中略）「忘れずに福島と関わってくださることが嬉しい」と仰っていましたが、「忘れないこと」、「一緒に考えること」をこれからも心に置いて震災プロジェクトに参加させていただきたいと思います。
・とてもよい企画だと思います。福島の課題を福島の方たちだけに背負わすのではなく、我が事として考えていこうと思います。

12 月 6 日(日) 双葉を追われて －目黒とみ子さん

加藤恵子さん（みやぎ民話の会）のご協力を得て、目黒とみ子さん（宮城民話の会/原子力災害伝承館語り部）に「双葉を追われて」と題して話をしてもらった。

双葉で暮らしていた目黒さんは、あの日、2〜3日で戻れると思って家を出たのに、二度と戻ることはできなくなった。何も持ち出すことができなかったが、たったひとつ持ち出したものがある。それは双葉町に伝わっていた昔話だったと言う。「私も眼を閉じてお話しますから、みなさまも眼を閉じて聞いて頂けたらと思います」と、目黒さんは「小太郎狐」のお話を始めた。

昔、太郎という狩りのうまい若者がいました。ある日、山に狩りに出かけましたが、あまりに奥深く入って、道に迷ってしまいました。昔、じいさまから、「山で迷ったら沢に沿って行け」と教わっていたので、そのとおりにすると、一軒家がありました。「道に迷ってしまったので、ひと晩だけ泊めてください」と頼むと、中からきれいな娘が出てきて、招き入れてくれました。その娘はキクという名前で、ひと晩が2晩と、2晩が3晩･･･、1年、2年、3年と経って、かわいい男の子が産まれました。

男の子は小太郎と名づけられ、大きくなると、お父さんと一緒に狩りに出かけるようになりました。ある時、悪者がきて、お父さんを連れて行ってしまいました。お母さんと小太郎はずっと待っていましたが、お父さんは帰ってきませんでした。

何年かが過ぎ、小太郎も立派な若者になりました。ある時、小太郎が狩りから帰ると、家の前に立派な狐がいました。「こたろう〜」「小太郎、私は山に住む狐だったのです。姿を見られてしまったからには、もう、ここに住むことはできません。この球はどんな悩みも解決してくれるから、これを持っておきなさい」と、お母さん狐は、小太郎に水晶の球を渡し、山に帰っていきました。

その頃、町では殿様が悩みを抱えていました。かわいい一人娘であるお姫様が病気になり、お医者様も呪い師も、誰も治すことができませんでした。どんな悩みでも解決すると小太郎の評判を聞いた殿様は、小太郎を呼びにやり、相談しましたた。小太郎が水晶の玉に耳をあてると、「こたろうや〜」と、お母さんの声が聞こえ、姫の寝ている布団の下で、蛇と蛙とナメクジが喧嘩をしていて、その息がお姫様の健康に害をなしているというのです。家来が布団を上げると、確かに確かに、蛇と蛙とナメクジが喧嘩をしていました。家来がそれを追い払うと、お姫様はすっかり元気になりました。

喜んだ殿様は、褒美をとらせようと何がよいか聞くと、小太郎は、「私は学問をしたいのです」と答えました。感心した殿様は、城で一番の先生をつけてくれました。学問ができるようになった小太郎は、お姫様と結婚し、二人はいつまでも幸せに暮らしました。殿様が亡くなった後は、小太郎が殿様になって、この領土を立派に治めたそうです。

「それでは、東日本大震災の大変だった話

に入っていきます」と目黒さんは、双葉町の人々の経験を物語り始めた。

双葉にも地震がきました。津波がきました。そして原発事故が起きました。双葉町は管理区域となり、今年の 3 月 4 日、一部を除いて解除になったのですが、住民は住んでいません。

3 月 11 日、夜 9 時が過ぎていました。各家庭に入っていた防災無線から、「細谷地区の住民は山田地区公民館に避難してください」と放送がありました。細谷地区は福島第一原発から 3 キロ圏内です。山田地区は、私の住んでいたところで 10 キロ圏です。私は民生委員をしていたので、出かけて行きました。みなさん着の身着のままで次々に入ってきました。大きな荷物を持っている人は見受けられませんでした。一晩だけ山田地区公民館に避難したら、自宅に戻れると思っていました。この時の細谷地区住民は 69 名です。

次の日の朝、「双葉町民は、全員、川俣小学校に避難してください」と放送がありました。これが私たちの旅の始まりです。双葉町は 7 千人弱の人口でした。

川俣小学校へ行くには、国道 114 線一本です。渋滞が予想されました。私は夫と一緒に相馬の方に向かいました。行く途中、救急車が横倒しになっていました。大きな船が打ち上げられ、コンクリートの橋が流され、車がいたる所に転がっていました。こんなところまで津波がきたのかと思うほど、家のガラスが割れ、それはひどいものでした。

海の近くに住んでいた親戚の家に寄ってみました。何もありませんでした。そこで私が見たものは、親戚の家より少し高いところに立っていた隣の家の二階の屋根の上の乗用車でした。親戚の家のおじいさんは二十歳の孫に助けられ、全員無事が確認されています。

別の親戚の家にも寄ってみました。その家は高台にあったため無事だったのですが、その家の旦那さんの話が忘れられません。地震の後、大きな地鳴りのような音がしたそうです。何だろうと思って玄関の戸をあけると、目の前が海でした。津波です。「俺はあと何年生きるわからないけれども、大変なものを見てしまった」と言いました。

その後、相馬にも行きました。相馬も海側は集落ごと流され、何もありませんでした。その光景を高台から見ていた時、隣の男性と立ち話をしました。「俺はな、きのうここに夢中で逃げて来たんだ。上りきった時、津波がきてな、若い娘さんが『助けてー』と流されていったんだ。俺にはどうすることもできなかった」。

別の人の話です。「海の上の空が黄色くなってな、津波に流される家は紙きれを見ているようだった」。怖ろしい話でした。双葉地方で津波の一番高い所は 22 メートルです。相馬にいた時、おかしな音が聞こえてきました。最初は何の音かわかりませんでした。午後 3 時 36 分でわかりました。それは、福島第一原発から聞こえてきた水素爆発の音だったのです。

この水素爆発を見た人の証言です。ドンという大きな音がして、たくさんの白い煙が立ち上ったそうです。その後に続く音はこういう音です。「ウォ〜〜〜〜ン」。この音がどこまでもどこまでも続いていました。

震災からしばらくして本人がようやく話す気になったと NHK のニュースでやっていました。双葉町の海寄りにあった自宅は

流され、奥さんと旦那さも流されたそうです。奥さんは力尽きて、旦那さんの眼の前で海に沈んでいきました。そして、その旦那さんが、翌日、海の上から見たものは、福島原発が爆発する様子でした。この旦那さんの心境は察するにあまりあります。何かの漂流物に乗っていたところ、空から発見され助けられたそうです。

双葉町新山地区に住んでいた人に聞いた話です。新山地区で防災無線を聞き逃してしまった人 19 名は、新山地区の公民館に避難していました。炊き出しのおにぎりでも作ろうと準備中、テレビで福島原発が爆発したことを知りました。その時の様子は、体で風圧を感じ、音とは言えない衝撃音、雪のような白いものが降ってきました。ただ驚くばかりでした。

ここにいることはできない。どうしようと思っていると、近くにある双葉厚生病院から自衛隊のヘリコプター3 機が患者さんを運ぶことを知りました。それに便乗させてもらうことにしました。一機で 20 人くらいは乗っていたと思います。

自衛隊の駐屯基地にひと晩泊めてもらいましたが、次の日の朝、全員で出ました。次は二本松男女共同センターです。ここにもひと晩泊めてもらいましたが、病人、患者さん専用ということで、また出ることになりました。次は、郡山高校、川俣高校、川俣の体育館、ここで物資を頂き、助かりました。食事はおにぎりとおつけもの、着の身着のままです。この後、双葉町は、役場機能を求めて、埼玉県スーパーアリーナへ、バス 40 台、1200 人で向かいました。お世話になった川俣町での支援に感謝いたします。

私は、みなさんにこの絵を見て頂きたくて、今日、ここにいます。この絵は 3 月 11 日お昼近く、我が家の南の空で見た不思議な雲です。下は我が家です。2011 年 2 時 46 分が震災ですから、震災 3 時間前の雲です。

紺碧の空に小さな丸い雲が縦横きちんと並んでいて、全体に四角でした。正しくは上下に長方形でした。私は生まれて初めて見た雲で、あの雲は何だろうと思いました。後でわかったことですが、この雲は高積雲、ひつじ雲、地震の予知雲だそうです。失敗したと思ったことは、あの雲の写真を撮らなかったことです。でも、描いた方がいいと教えてくれる人がいて、描きました。

あの大揺れの時、私は、津波がくるだろうと思いました。でも、原発が危険な状態になるとは思うことがありませんでした。私は自宅にいましたので、揺れが収まってすぐ外に出ました。民生委員として、高齢者の安否確認に行きました。周りの様子は我が家も同じでしたが、瓦が落ち、車のフロントガラスが割れていました。あの大揺れの時、私はドーンという音を 2 回聞きました。それは、常磐線の上り下りの高架が揺れによりずれて地上に落下する音でした。大揺れは 4 分間続きました。震度 6 強、線路が落ち

る時、電車が走っていたらと思うゾッとします。その場所は、双葉駅から南の方に少し離れたところです。下には国道 288 号線が通っています。

この後も、目黒さんは写真を示しながら、双葉町民の体験を紹介してくれた。午前中に卒業式をしていた双葉中学校体育館の被災、双葉南小学校玄関にそのまま置かれたランドセルやくつ。それから、子どもたちの話や、原発事故による強制避難で捜索ができなくなって置き去りにされた人々のこと。声を聞いたのに、助けに行けなくなってしまった消防団員の苦しみ。2023 年 4 月 23 日午前 1 時に双葉町は封鎖された。目黒さんはそれから 8 回も転居を余儀なくされたそうだ。

目黒さんは、宮城に来て、みやぎ民話の会に入会し、双葉の話を語る機会を得た。語るためにまとめてみて、「私でさえこんなに話があるのだから、他の人はもっとすごい話があるのではないか」「孫たちの世代に双葉の体験を伝えなければならない」と思った。双葉から宮城に避難した人の会で協力してもらい、44 人の貴重な体験が集められ、冊子として発刊した。『放射能から逃れて』同じ時、同じ場所にいたのに、一人一人の体験はまったく違うものだった。

避難先でたくさんの人たちのお世話になったと感謝の言葉を繰り返しながら、目黒さんは、「避難で一番大変だったのは、お世話になることでした」と語った。目黒さんの話に参加者は言葉を失い、ZOOM での語りであっても、それぞれが身体で何かを感じ取っていたようだった。参加者アンケートにも多くの感想が寄せられた。

- 伝承者の語りを通し、当時の状況が目の前に浮かび上がり、涙が止まらず、心が揺さぶられました。
- 自分自身の知らないことについて知ることができ、語り手の方から聞くことでさまざまな思いが胸に残りました。また、自分自身の知識の少なさを痛感することができました。
- 語りの内容も、語り方も、非常に伝わるものがあった。語り方に関しても特に私たち世代が忘れていた言葉のまっすぐさ、淡々と伝える決意も感じられた。
- 実際に避難されている方の語りを聴く機会はほとんどなく、とても貴重なお話を

聴かせていただきました。

・語り手の話は情景が浮かぶような臨場感で、写真を元にしたお話からは当時の様子がありありとわかり、リモートながら語りを直接聞いたような気になりました。

・事実の生の語りがこんなにもすごい力を持っていることを初めて知りました。事実もすさまじいものでしたが、人の魂を揺さぶるような語りでした。

・加藤さん、目黒さんの存在感。とてもよかったです。

・貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました。原発事故を福島だけの問題に留めず、我が事として考えていきます。どうかお身体にお気をつけください。

・ある日突然、今まで刻んできた歴史が絶たれ、故郷が無残に変化し、家族がバラバラになり、新天地で生きていかざるをえないという生活がどんなことなのか、語りの中で知り、心が痛くなりました。しかし、同時に知らなければならないことだと思いました。ありがとうございました。どうぞお体に気をつけて、今後も語り継いでくださいませ。

・語りと視覚的な資料でこんなにも、心に訴えかけることが出来るということを知りました。双葉で震災の時の起こったことを、生の声で一言ひとこと魂を込めて伝えていただき、心の奥に響きました。大きな声ではないけれど、とても力強く、心の叫びを聞いたような気がしました。孫の世代に残しておきたいという思いで、周りの方々に呼び掛けてまとめられた証言集が、若い世代にきちんと届いて、感想が寄せられたということに感動を覚えました。

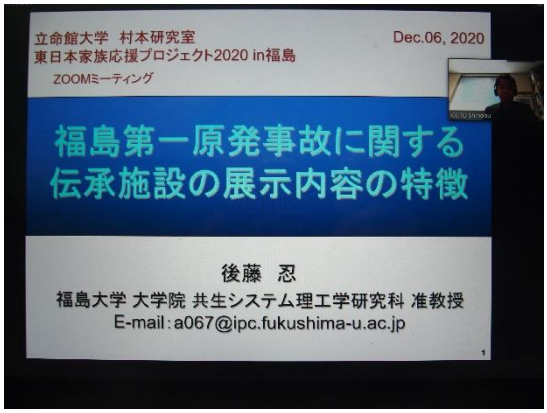
・実際にこのようなことが起こるのですね。目黒さんの思いがつながったのですね。福島の原発の理不尽な出来事がもたらした悲惨な事実を伝えていただきましたが、最後に若い世代に伝えることの大切さや、若い人達がきちんと受け止めてくれるのだという希望を抱くことにもなりました。本当に有難うございました。

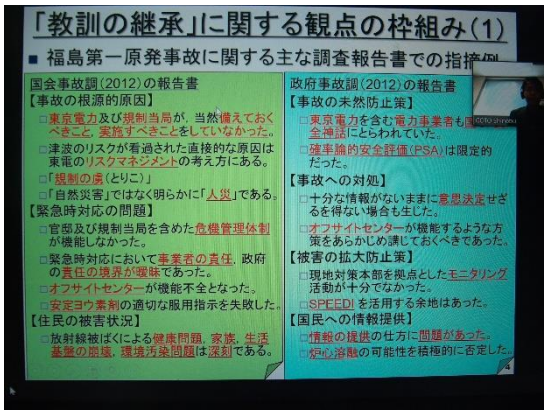
・私は、皆さんの辛さをまだまだ分かっていないと思います。でも、こうして伝えていただいたことを聞いた者として、自分なりに伝えていきたいと考えています。

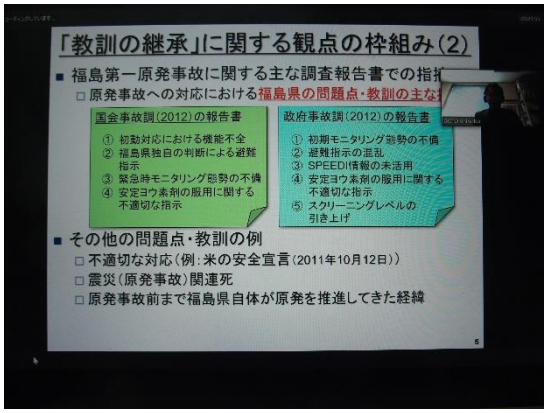
12 月 6 日(日) 福島第一原発事故に関する伝承施設の展示内容の特徴 －後藤忍さん

福島のプログラムでは、毎年、福島大学の後藤忍先生をお訪ねしている。例年、早目に現地へ向かうことのできる者しか、後藤先生のお話を聴けないのだが、今年はリモート開催のおかげで、多くの参加者に聴いてもらうことができた。

震災・原発事故の教訓を伝える施設はたくさんある。図のピンクが公共施設、緑が民間施設である。まずは、9 月にオープンした伝承館の展示についてだが、まだ分析途中なので、今後、結果が変更になる可能性があることを前提にした話ということだった。





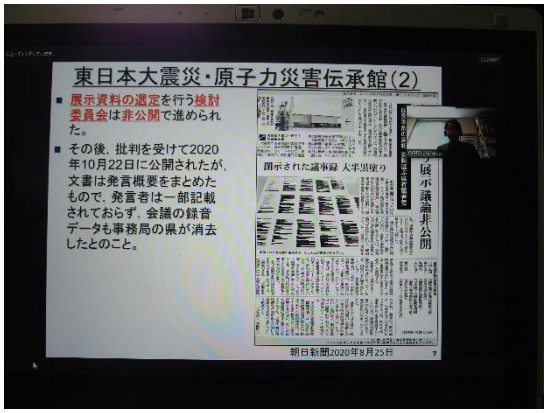


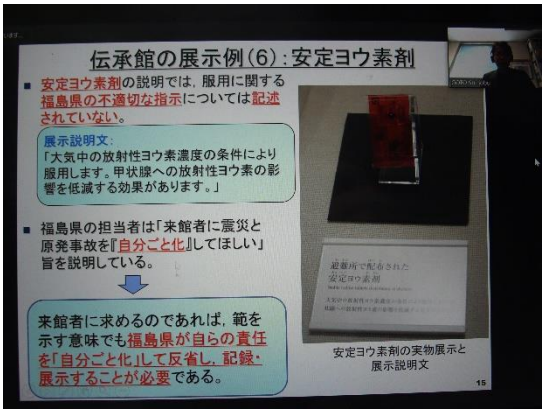
教訓の継承に関する観点の枠組みとしては、調査報告書の内容を参照することができるだろう。『国会事故調』（2012）、『政府事故調』（2012）では、国や東電の不十分な点を指摘している。たとえば、スピーディーを活用できる余地があったという指摘や、国民への情報提供に問題があったなどである。福島県の問題点や教訓の指摘もある。それ以外にも、関連死や、福島県が原発を推進してきたことも挙げられるだろう。

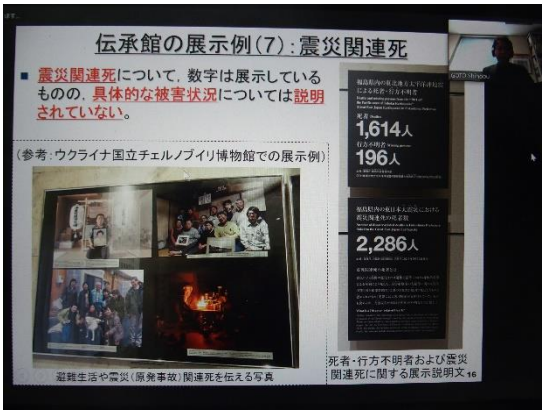
原発災害伝承館は、福島県が双葉町に整備している施設で、53 億円の国費によってできている。イノベーション・コースト構想の一環でできたので、復興に重きが置かれている。初代館長は、博物館の専門ではない高村昇さん（長崎大学）である。

HP にも挙げられているが、3 つの基本理念があり、①原子力災害と復興の記録や教訓の「未来への継承・世界との共有」　②福島にしかない原子力災害の経験や教訓を生かす「防災・減災」　③福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化・伝統の再生復興を担う人材の育成等による「復興の加速化への寄与」である。

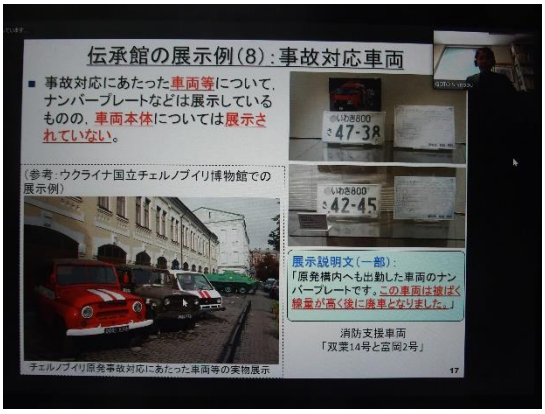
展示資料の選定は非公開で行われ、朝日新聞などが議事録の開示請求をしたが、多くの部分が黒塗りにされていた。開館 1 年前に河北新報が取り上げてくれ、いくつかの指摘をした。復興の強調が目立ち、福島県が原発を推進していたことや、スピーディーの教訓がなかった。復興を語るにしても、教訓を礎にして、過去の反省の上に成り立つものである。





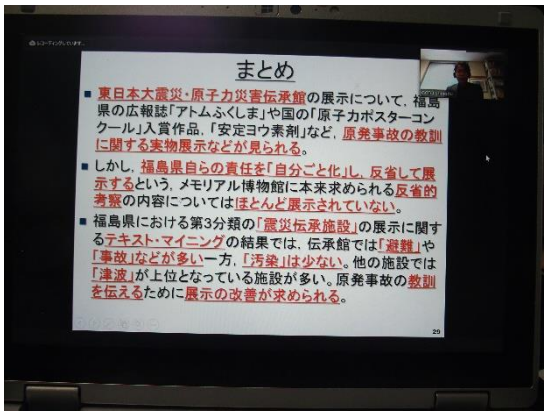


オープン後、10 月に訪問した後、河北新報がまた取り上げてくれた。県の担当者は震災を来館者が「自分ごと化」して欲しいというが、福島県が「自分ごと化」できていないのではないか。「関連死」への言及はあったが、数字だけで具体的な状況が見えない。ウクライナの博物館には、関連死した人の記事や写真が展示されていた。また、事故対応にあたった車両の実物展示もあった。甲状腺がんの調査結果についても言及はなかった。29 人の語り部については、ずいぶん批判もされた。自分は 2 人の話を聞いたが、天災として語られ、人災としての側面が語られなかったことは気になった。



まだ分析途中だが、伝承館の説明文から抽出した24,000語のテキストマイニングからは、「避難」が一番多く使われていて、「事故」「原発事故」等の否定語が上位に入り、「復興」も多く使われている一方で、「汚染」

が上位 150 語の中に入っていなかったとのことだった。「汚染」は福島の復興を語る上でマイナスなのだろうと推察されていた。『放射線副読本』で「汚染」の語が排除され、「汚染の除染」となっている。



参加者とのディスカッションを行ったが、河野さんから「チェルノブイリは世界にとっての課題であることがわかる展示だったが、伝承館は福島の話だと囲い込んでいる」、団さんから「チェルノブイリには、世界中から贈られたが、放射線量が高すぎてすぐに使えなくなったというさまざまな重機の展示に、人が扱え切れないものが実感された。モノが持っている力がある」、藍原さんから「国や県の姿勢は見えているので、福島県民のボトムアップでやるべきことがあると思う。ここに出てこない重要なもの、たとえば、1 本道を隔てると帰還困難区域で、中間貯蔵施設がある。館の中より館の外の方が多くを語る。伝承館の中には、県民から集めた貴重な資料がたくさんあり、あのまま閉じ込められてしまうのではないか。県民が家から集めて寄付したものが、国のレギュレーションからはずれたことによって、お蔵入りされ、第二の石棺、記憶の石棺になってしまうのではないかと思い、ジャーナリストとしてウォッチしている。また、謝り方を知らないのだと思っている。東電の廃炉記念館の最初のビデオで、真っ暗になって、誠に申し訳ありませんと言うが、謝罪って何だろう、責任て何だろうと深く考えさせられた。一人一人が見たうえで、県民として提案していく必要があるのではないかと思う」という感想が挙げられた。

後藤さんからは、白河で、来年、市民のボトムアップで、伝承館で実物展示に到らずお蔵入りしている「原子力　明るい未来のエネルギー」の看板の展示を企画していること、いわきの古滝屋で水俣の考証館に倣った博物館をオープンさせる準備がなされているという情報提供があった。古滝屋は、一度宿泊したことがあり、部屋に置かれていた手作り風の冊子に感銘を受けたことがある。オープンしたら、真っ先に訪れたいと思った。また、後藤さんご自身でも、原発推進の教育広報で消されてきたものを展示することを考えているとのことだった。

後藤さんの姿勢には感じるものが多かったようで、参加者アンケートには、さまざまな声が寄せられた。

・福島の伝承施設をチェルノブイリのような物に語らせる施設、悲惨さを伝えていく施設にしていく必要があると感じた。
・後藤先生が信念をもって丁寧に調べられた検証のお話をお聞きすることができ、大変勉強になった。
・教訓を継承するための施設と思っていたが、疑問の残る点が多くあることをよく知ることができた。

・自分がどんな立ち位置で物事を見ていくのかを考えさせられた。
・原発の課題が山積みであることを再認識できた。私自身もおかしいと感じる事は、自身で発信できる人間になりたいと後藤先生のお話から感じました。ありがとうございました。
・時が経ち、復興についてのマスコミ報道も少なくなり、今、いかに福島について考えていけばよいのかを迷走することがあります。

2013 年に偶然、後藤先生の論文「こころのケアとしての減思力の防止、『放射線と被ばくの問題を考えるための副読本』をつくって」に出会いました。それは、国が国民の思考をコントロールしているということについて、丁寧に検証されているものでした。とても衝撃を受けました。被ばくされた方々が、正しいことを知らされず、間違った捉え方にも気が付かず、今後健康被害に遭うことは十分考えられます。

今回のお話も、その後ずっとこの検証を続け、本来あるべき伝承、情報公開がなされていないことを後藤先生は伝えられていました。チェルノブイリの博物館では、原発で自死された遺族の方の写真がありました。水俣の語り部の実名の公表についても、今回の伝承館との違いがあります。

市民の力で、展示がよりよいものになっていくことも教えていただき、こうしてきちんと詳細にわたってどうあるべきかを示され、情報発信されていることは意義のあることだと思いました。今後も、学生の皆さんと取り組みを続けていかれることには、若い世代にこのことを引き継いでおられるという重要な役割も果たしておられます。社会の大きな力との闘いもあり葛藤されていると思いますが、是非またお聞きしたいと思っています。貴重なお話と資料を本当に有難うございました。
・市民の力を感じることができたし、あきらめてはいけないこと、継続の大切さを感じた。
・貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました。原発に対して、自分も声を上げて行動していこうと思います。
・施設は記録や事実の報告であって、教訓にするための内容ではないと感じました。教訓とは同じことを繰り返さないため今後どうすべきなのか具体的な計画や行動として役立つものにならないといけない。実際全国に原発はたくさんあり、安定ヨウ素剤などどのように利用すべきか不明で、備える知識になっていないことに不安を感じた。津波からは逃げることしかできないが、原発は人々の意思で稼働させない、廃炉にすることなど未然に防ぐことができる。天災のように抗えないものではなく、抗えることができるのにあたかも抗えないように現状（日本の原発稼働）を受け入れることに違和感しかない。

原爆ドームのように悲惨な展示があっても、世界の核保有について強くいえない日本においては、恩恵のある原発について悪者にできないのは当たり前かもしれないが、それを取り上げない（言えない？）マスコミ、だから知らない日本の

市民が、あまりにも国の都合でコントロールされていることに情けなく感じました。批判的に見るという視点がどういうことか、弱者の視点に立って代弁することの重要性を実感しました。

12 月 6 日(日) フクシマとグローバルヒバクシャをつなぐ 藍原寛子さん

フリージャーナリスト藍原寛子さんとは、2014 年に水俣でご一緒して以来、毎年福島に訪れ、あるいは立命館にお招きし、貴重な情報を頂くとともに、多くを学ばせてもらっている。後藤康夫・後藤宣代（2020）『21 世紀の新しい社会運動とフクシマ -立ち上がった人々の潜勢力』（八朔社）という本が出た。社会人大学院生たちの原稿をまとめたというもので、エンパワーされる良い本だった。その中に、藍原さんは、「グローバルヒバクシャとフクシマをつなぐ ―その終わらない旅，そして運動」という素晴らしい 1 章を書いていて、今回はその話をしてもらいたいとお招きした。

グローバルヒバクシャ

グローバルヒバクシャとは、日本平和学会の分科会「グローバルヒバクシャ」が提唱したもので、「広島・長崎の原爆被害と共に、核開発が推進されてきた結果、被害者が世界で生み出され、甚大な環境汚染が地球規模で引き起こされてきた現実を明確に可視化すべく、作り上げた新たな概念装置である。グローバルヒバクシャは、各地の差異に留意しながらも、地域の特殊問題としてのみとらえるのではなく、広島・長崎を含め様々な核被害の問題を横断的にとらえ、核被害者を結びつけていきたいという問題意識を投影した言葉でもある」（日本平和学会 HP）。

放射能は見えないものだが、測定、体験、概念、知識などを使って、人々は何とかして見ようとしてきた。見えないものを見ようとしてきた体験は、過去にもあった。たとえば、米ハンフォード、広島、長崎である。その一方で、見えなくされているものの仕組みがあることもわかった。基準値を作り線引きすることで、人々の体験が変えられていく。被害の実態も、線引きされることで生じるものがある。何かに置き換えたり、取り戻すことができない被害がある。時間空間を越えた共通の教訓を知りたいと、世界各地を取材している。グローバルヒバクシャは、核被害による被害の体験をどのように認識しているのか。時間や空間を超えた共通の体験と、そこから得た教訓はあるのか。それは何か。

原発とともに成長して

1967 年、福島市で生まれた。福島原発 1 号機が着工した年だった。その歴史を体感

しながら成長したのかもしれない。中学生の時、初めて原発の存在を知った。当時、親に頼んで福島民報、福島民友と朝日新聞の３紙を取ってもらって、読み比べていた。朝日新聞には「木村県政汚職事件」が載ったが、地元の２紙には載らなかった。印象に残っている。

高校の時、バトミントンの試合で富岡町の体育館に行き、その立派さに驚いていると、友達がコソコソと耳打ちしてくれた。浜通り地区が原発の恩恵を受けていることを知った。大学のゼミで初めて原発を視察し、原発作業員のことを知った。

新聞記者になり、記者向けの視察があった。最初、女性の先輩が行くはずだったが、「将来、子どもを産みたいから、私は行きません」と言った。大きな衝撃を受けたが、「じゃあ、お前行け」と言われて、もやもやしたものを抱えて行った。避難した人、しなかった人のことを考える時に思い出す。地元紙の記者として、原発サイトを初めて取材した時のこと。朝日新聞だけが、自前のガイガーカウンターを持っていた。他の記者は東電のものを借りたが、中に入ると朝日新聞社のだけがピーピーと鳴った。東電のはゼロのままで変化なし。問題意識が拡がった。

いわき支社にも勤務していたが、マイナー事故多発（老朽化の証左）と安全神話、R-DAN ネットワーク（市民による放射能測定）、たんぽぽ舎（チェルノブイリ以後の市民による放射能測定や原発反対運動を行っている）、また、いわきにはチェルノブイリの子どもたちの保養を受け入れた家庭があって、取材していた。佐藤栄佐久元知事と東電の裁判も取材していた。

福島からフクシマへ　フランス

3.11 後、福島 FUKUSHIMA、フクシマになり、海外の取材に行くようになった。政府の話ではなく、各地の市民の動きを知りたいという切実な気持ちが市民のなかに産まれた。最初にフランスに行った。フランスはチェルノブイリの風下で、影響を受けたところである。2012 年 3 月に、佐藤栄佐久さんが行くというので、部分的に合流して、市民の測定を見に行った。

原発大国フランスの南東部、小都市ヴァランスにある「クリラッド」（CRIIRAD）と、西部ノルマンディ地方カーンにある「アクロ」（ACRO）という 2 つの放射線測定 NGO を訪問した。1986 年のチェルノブイリ事故後から活動を続けていた。

クリラッドは、1997 年、ノルマンディ地方のラ・アーグ再処理施設の排水パイプが高濃度の放射能で汚染されていた問題を NGO グリーンピースと共に調査して解明した。フランス国内に残る 200 カ所ものウラン鉱山閉山後に残された多くの放射性岩石の問題も指摘している。

アクローは、年 2 回、ノルマンディ地方の 600 キロにわたる沿岸の 12 測定地点で沿岸の魚介類や海藻、海の泥などを測定している。河川 10 地点の水質環境調査を定

期的に実施し、スキーリゾートの駐車場で汚染岩石が残されて高い放射線を発していたケースや、製材工場の裏のウラン鉱山跡で高い放射能汚染が放置されていたケースも、独自調査で発見した。そこから除染につながった。

測定に関わる人の中には、友人の息子がチェルノブイリ事故後病気になったことがきっかけで参加した人もいた。「放射能雲は国境を超えてまで来ない」と言ったフランス政府の嘘があった。こういうことは隠されるため、測定しようということになった。測定の活動から、フランスの旧植民地ニジェールのウラン鉱山で、労働者や周辺住民が被ばくした問題も世界に発信した。自分たちがチェルノブイリの被害者であるという認識と、自国フランスが持つ加害性への直面まで視点が拡がっている。自己から 25 年経っても測定を続けていた。

マーシャル諸島共和国

ミクロネシアのマーシャル諸島共和国は日本の南東、約 4600 キロの太平洋の環礁の国である。2014 年 3 月 1 日のビキニデイを取材した。首都マジュロで、ビキニ事件から 60 年のメモリアル式典があった。60 年後の福島はどうなっているのか。

政府の元外務大臣、トニー・デブルム（2017 年死去）は、クワジェリン環礁で核実験のフォールアウト（放射線の降下物）の被害に遭った。その後避難し、故郷喪失、健康被害を受けた。インタビューして、福島へのメッセージを聞くと、「（加害者は）嘘をつき（LIE）、否定し（DENY），機密扱い（CLASSIFIED）にする。フクシマでも同じことが起きるだろう」と回答した。

デブルムさんは、2014 年、核保有国に核軍縮の義務の履行を求めて ICJ（国際司法裁判所）に提訴した。この提訴には、日本を含め世界の弁護士たちが知恵を出し合って協力した。2016 年、大国はこぞって審議拒否し、「世界唯一の被ばく国」日本も、核武装国のアメリカ、ロシア、中国、フランス、イギリス、インドなどと並び、審議しない案に賛成した。

アバッカ・アンジャインさんはロンゲラップ環礁選出の元上院議員で、福島に招いた。福島県立美術館には、「ラッキードラゴン」というビキニを象徴する版画がある。「こうした被害は最後にしなければなりませんと書かなければなりませんね」と言ってくれた。ロンゲラップ島は、第五福竜丸と共に死の灰を浴びた。父ジェトン・アンジャイン上院議員、父の兄弟にあたるネルソンとジョンアンジャインも来日して被ばく問題を訴え、日本の原水爆反対運動にも大きな影響を与えた。

イギリス・ウエールズ

発事故後、日本は海外に原発を売ろうと進出した。「福島原発事故を経験したからこそ安全第一でやります」と言う。「これはいかん」と、2018 年 2 月、福島の農民 2 人が立ち上がった。米とあんぽ柿の生産者であり、福島県農民連会長の根本敬（さとし）さんと、帰還困難区域の浪江町津島地区で畜産を営んでいた浪江町議の馬場績（いさお）さんである。

日立製作所の 100%子会社、ホライズン・ニュークリアー・パワー社がイギリス・ウェールズのアングルシー島に新原子炉ウィルファ B を建設しようとしていた。

2 人は、現地に行って農家の人に会いたいと、FOE･JAPAN から情報をもらい、原発建設予定地で酪農・畜産を営むリチャード・ジョーンズと妻グゥエンダを訪ねた。「農地は先祖の代から、それ以上、何百年も前からここにある。農家は農地によって生かされている。土地は売り買いの道具ではない」「他の農家はビジネスマンのように土地を売った。日立の本社の人は、札束で土地を買うだけ、ここに来たこともない。ちゃんと来て、私たちと話すべきだ」と主張していた。数々の嫌がらせや誹謗中傷を受けても、農地というものに対する説明責任と自信があった。

2 人は抵抗の印として、日立の原発計画地である自分の土地に大きな風車を建てていた。馬場さんは、「今も自宅が浪江町の帰還困難区域にある。自宅に帰るのに行政の許可が必要で、防護服を着て入る」「農地や牧草地はこれほど荒れている。長期的に避難者を生み、帰れるかどうか見通しも立たない悲惨な事故を起こすのが原発。この地に原発を建設してはならない」と語り、根本さんも、避難できずに牛舎で餓死した牛たちの写真や「放射能ピラミッド」と地元では呼ばれている除染廃棄物の巨大な黒いコンテナバッグの山の写真を見せ、「アングルシーは美しい地域。こんな汚染物をまき散らし、人々を分断する原発はいらない」と励ました。

「フクシマでは、東電福島第二原発の廃炉に向けて住民が議会を動かし、県内 59 の全市町村議会が廃炉を求める意見書や決議を出した。そしてついに東電が廃炉を表明した。私たちには力がある。草の根民主主義の力を信じ、共に闘おう」「百姓は百のこと、なんでもできるから百姓なんだ。エネルギーだって自分たちで作り出せる。私も原発事故後、自宅に太陽熱温水器と薪ボイラーを設置した。農民連も県内各地域

で発電所を作り、年間約 3 億円の売電収入を得ている」と言い、リチャードさんと「これからも脱原発のために連帯していこう」と固い握手を交わした。

この訪問後、日立製作所とホライズン社の原発増設事業は白紙撤回された。

リチャードさん、グゥエンダさん

福島の2人の農民

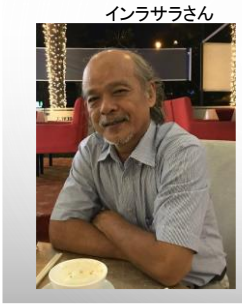
ベトナム

ベトナムでも日本企業資本の原発が計画された。少数民族チャム人の土地ニントゥアンである。2011 年の福島原発事故が起きた際、この建設予定地にたまたま福島の人が滞在していたので、オンタイムで情報が入り、市民の反原発運動が立ち上がった。反対運動の先頭に立ったのが詩人でジャーナリストのインラサラさんは、インターネットなどで積極的に内外に発信。命を狙われたことも何度かあり、検閲が厳しくて連絡をとるのも気をつけるようにと言われた。「100 万ドルやるから活動をやめろ」「原稿を高く買う」と言われるなど、会合での無視などの手法は日本の「原子力ムラ」が使う手段と酷似している。

インサラさんは、チェルノブイリ、ニントゥアン、フクシマを合わせた造語をタイトルにした小説『チェルノフニット』を発表した。3.11 フクシマが原発の危険性をチャムの人々に身近な危険として知らせてくれたことが、原発反対に向けて動く大きな動機になったという。彼の発信によって、イギリスやフランス、日本などの海外メディアや、研究者、支援の NGO など賛同者が増え、ベトナムでは極めて珍しい署名活動も展開され、その数は 600 人を超えた。原発建設計画は 2014 年 1 月に白紙撤回された。

原発計画はなくなったが、予定地は整地され、電線もあって使える状態。ベトナム政府がキャンセル料を求められている可能性もあり、建設予定地が原発の代替として核のゴミ捨て場などに再利用され、別の国の企業が進出するなどということにならないよう、今後も厳しく監視していく必要があるという。「原発予定地でのベトナム人の歴史と比べ、チャム人の歴史ははるかに長い。ニントゥアン省にはベトナムの半分以上のチャム人が暮らし、100 カ所以上の重要な史跡やお寺がある。もしも原発事故が起きたら、自分たちにとって大事なものが失われてしまう。そう考えたら、何も怖

くなくなった。とにかく必死で反対した」と、インラサラの闘いはまだ終わってはいない。


インラサラさん

原発建設予定地にある漁港と住宅地

アメリカ・スリーマイル島

アメリカ東海岸ペンシルバニア州スリーマイル島には3度行った。ここも軍と関係があり、福島と同じく、もとは軍の飛行場があったところである。島なので出入りを管理できる。40年前の1979年3月28日、スリーマイル島の原発が事故を起こした。運転開始からわずか4カ月弱の2号機が炉心溶融を伴う事故を起こし、その後保管状態になっている。事故から約5か月後、除染と燃料取り出しが始まったが、2号機の廃炉作業は完全完了していない。1号機の運転と作業員・住民の被ばくに反対する運動が、地元の市民団体「スリーマイル・アイランド・アラート（TMIアラート）」により、現在も続けられている。

市民から見た事故後の状況は、全体像を見るとあまりにも3.11フクシマに酷似している。それは、①元軍事施設・小さな空港　②国策も絡んだ民間の原発事業者が起こした事故　③放射能の拡散情報が迅速に地元住民に伝えられず、避難が遅れた　④事故後も十分な健康調査と補償が行われず、低線量被ばくや内部被ばくがほとんど無視された　⑤森林除染は技術開発すらされていない。

原発建設時から反対運動と監視活動を続けてきたスリーマイル・アイランド・アラート（TMIA）のメアリー・スタモス・オズボーンさんは、事故直後の初期段階から、被ばく・健康問題、環境汚染を告発し、熱心に活動している。かつては世界各地で被害の状況を伝えていた。事故当日、住民には何も知らされなかったが、メディアが何かの取材で集まっているとの情報を得た。子どもたちは普段と変わらず学校に向かったが、学校では風船を飛ばすイベントがあり、事故を直観したメアリーさんら地域の人たちは、娘に冬のコートを着せ、フードをかぶるように言った。

原子炉のメルトダウンが明らかになったのは数日後で、メアリーさん一家は数日間避難し、4月6日に帰還した。原発事故の映画「チャイナシンドローム」封切りと重なって、世界中の大問題になった。メアリーさんは、事故直後「金属味の空気」を感じ、家の中の植物が短期間で異常なほどに成長した。科学者たちは、「放射能の影響ではない。因果関係は証明されない」と言うが、地元の住民は「DNAへの影響が起きている前触れなら危険」と、採取した植物を持参し、多くの専門家に直接質問し、議論している。「感情的な人だ」「非科学

的だ」という批判や心無いうわさがある一方で、メアリーさんに触発されて、奇形の植物を探し出す人も増えている。

住民からの健康調査実施の訴えにより、公衆衛生基金で TMI-PRRC スリーマイル原発健康問題委員会が発足し、市民の手で健康調査や聞き取りが開始した。専門家の中にも、ネバダ州やユタ州の核実験場での健康被害やスリーマイル原発事故後の健康被害を多角的に分析する必要があると提言する人が現れ、市民や研究者のネットワークで様々な形での被害調査が始まった。

アメリカ・スリーマイル事故から 10 年後、メアリーさんは、「普通の母親や父親が、原子力に関する”専門家”になる必要はないと気が付きました。本当に必要なのは『人間として持たなければならない当たり前の常識』だけであり、まさしくそれは原子力を推進している人たちに欠けていることです」と言った。メアリーさんらの活動により、ニューヨークのスミソニアン博物館で数々の情報、資料、奇形化した植物サンプルをスリーマイル原発事故の記録として保存することが決定された。40 年の式典に合わせ、多くの市民が訪れた。

後年になって、隣家のフードをかぶらなかった女の子は白血病になり、メアリーさんは何も言わなかったことを後悔している。

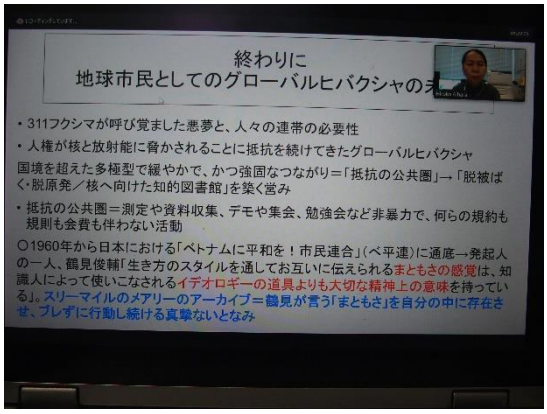
おわりに

フクシマが呼び覚ました悪夢と人権が核と放射能に脅かされることに抵抗を続けてきたグローバルヒバクシャ。測定や資料収集、デモや集会、勉強会など、非暴力で、何らの規約も規則も会費も伴わない活動、国境を超えた多極型で緩やかで、かつ強固なつながりが「抵抗の公共圏」を形成し、「脱被ばく・脱原発／核へ向けた知的図書館」を築く営みが始まっている。

1960 年から「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）の発起人の一人、鶴見俊輔さんは、「生き方のスタイルを通してお互いに伝えられるまともさの感覚は、知識人によって使いこなされるイデオロギーの道具よりも大切な精神上の意味を持っている」と語った。スリーマイルのメアリーさんのアーカイブは、この「まともさ」を自分の中に存在させ、ブレずに行動し続ける真摯な営みである。

こういった一人一人の強烈な体験は公的ミュージアムに残らないから、それは自分の仕事だなと思う。最後は自分に返って帰ってくる。パズルの 1 ピースでも、集まれば力になっていく。自分自身への未来への

重い問いでもある。



藍原さんのお話も胸に響くものが多く、参加者アンケートにはたくさんの感想が寄せられた。

・とても貴重なお話でした。世界と福島がつながり、市民の手で未来を作っていける希望を持つことができました。
・とても丁寧なお話をありがとうございます。原発について、自分も声を上げて行動していこうと思います。
・お金や発展より大切なものがあり、誰にとっても故郷の家や景色が失われてることは辛いが失ってからわかるのは辛い。失わずにすむような道を世界中で考えたいと思いました。
・体系的な話を聞く機会はなかなかないが、核被害者というくくりはその通りだと思う。
・今回の藍原さんのお話を聞かせていただき、一市民の抵抗が人を、社会を変えることがあるんだということに希望に持ち、自分の活動を続けていきたいと思います。
・自分達で行動してもいいのだと勇気づけられました。
・フクシマで起こったことに対して、どう抵抗したらよいのか、実際のグローバルな取り組みのお話は、大変説得力がありました。藍原さんから教えていただいた視点に勇気をいただきました。
・世界の原発に関する動きを知ることで、日本全体の思考の幼さのようなものが露呈し、何ともいえない気持ちになった。自分はどんな考えを示していくのか、考え続けなければならないと感じた。
・グローバルヒバクシャという事柄について学ぶことが出来ました。日本が事故後も海外に原発を建設しようとしていた事実にショックを受けました。ですが、世界中に原発について考え行動している方がいるということが分かり、もしかしたら原発がない時代も来るのではないかと思えました。
・世界には様々な原発事故があり、そこから学んだ知恵がたくさんあるにもかかわらず、日本はなぜそれを教訓にできなかったのか。お金や発展より大切なものがあり、誰にとっても故郷の家や景色が失われてることは辛いが失ってからわかるのは辛い。失わずにすむような道を世界中で考えたいと思いました。

・勇気をもらいました。毎回福島の震災プロジェクトに参加させていただき、福島の悲惨さや理不尽さを現地の方々から伝え聞き、現地を見せて頂く度に、どう考えたらよいのだろう、私たちに何かできるのだろうかと消極的な思いで帰っていました。今日のお話にあった、福島のことを伝えに行った根本さんや馬場さん、たった一人で活動を始めたインラサムさん、一人の何も専門性を持たない主婦が被ばく・健康問題等についての活動を展開され、それが、世界に広がりました。一市民の草の根の民主主義の力に感動しました。「抵抗の公共圏」についても、考えていこうと思いました。何ができるかはわかりませんが、今、私はNPO法人として、子育て支援を行っています。行政のやり方に涙しながら抗議することもあります。自分が一生懸命語っても変わらないこともあります。今回の藍原さんのお話を聞かせていただき、一市民の抵抗が人を、社会を変えることがあるんだということに希望に持ち、自分の活動を続けていきたいと思います。また、応援してくれる人や賛同者を増やすために、人とのつながりを大切にして、丁寧に温かく関わっていきたいと思います。「フクシマ」が世界中の人たちの問題としてとらえられることを願って、何ができるかわかりませんが、自分が今できることを次世代のためにやっていきたいと思います。力をいただき、本当に有り難うございました。

今年はリモート開催となり、現地に行くことができなかったが、Zoom を使ってより多くの方々のお話を聴くことができた。同時に、これまで参加できなかった人たちも参加可能になり、素晴らしいプログラムを多くの人と共有できてとても嬉しかった。

福島の状況は相変わらず、いや、ますます厳しい。そんななかで、声を上げ、つながり、できることをコツコツ続けている人々には敬意を感じるばかりである。藍原さんが言うところの、グローバルヒバクシャの「抵抗の公共圏」にささやかに連なることができたら、そして、一人でも多くの人に福島のことを知り、関心を持ってもらえたらと願う。

来年は、現地に行って、子どもたちとクリスマスカレンダーを作ったり、テーブルを囲んでみんなでわいわいおしゃべりしながら食事したりすることができたらいいなと思っている。最終年をどのような形で着地させるのか、プロジェクト終了後、何をどんなふうにつなげていけるのか考えどころだ。今年のリモートには、たくさんのヒントが隠されているはずだ。

つづく